

テーマ

①文部科学省が定めている「小学校施設整備指針」、本市教育委員会が定めている「ナゴヤ学びのコンパス」を踏まえ、多様化する教育ニーズに応える機能を備えた施設整備の考え方について ②学校と地域が連携・協働し、子どもたちをはぐくんでいける施設整備の考え方について ③学校と地域との交流が盛んである地域性を踏まえ、今後も主催予定の地域・保護者・学校との対話の場である懇談会での多様な意見を反映するための設計業務の実施体制及びコミュニケーションの取り方について

つながる学校 広がる学び

大和小と内山小 / 地域と学校 / 子どもと学び



図1. 学びの空間が広がる地域と学校をつなぐ「つながる学校」のイメージ

① 多様化する教育ニーズに応える機能を備えた施設整備の考え方について

■ メディアセンターを中心にゆるやかにつながる学びの空間

・「メディアセンター」(図書室・ICT・多目的)を校舎の中央に配し、そこから吹抜けを介し、教室と多目的室、特別教室がゆるやかにつながるゾーニングとし、主体的で探究的かつ協働的な学習活動を支え、大和小・内山小の特徴を活かした、**自発的に学び続ける**学びの空間とします。

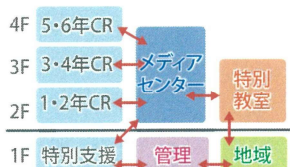


図2. つながる学びの空間イメージ

・特別教室を西側にまとめ、児童が展示、発表できる「教科ギャラリー」や屋外活動のためのテラスと連携させ、**興味関心を喚起し自立して学び続ける**ことができる計画とします。

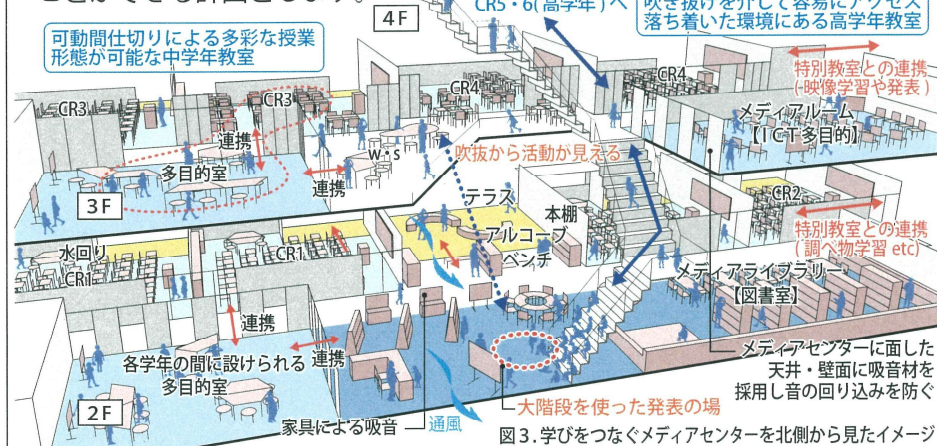


図3. 学びをつなぐメディアセンターを北側から見たイメージ

■ 学年ごとの落ち着きとつながりを創る多様な設え

・低学年と中高学年で異なる設えとし、**成長過程に応じた多様な学習内容、学習形態を支援し、多目的室・ワークスペース(W・S)を学年ごとに分散配置**することで、**豊かな創造性を発揮できる多様な教室周り**とします。

・可動間仕切りや吸音パネル付家具により、**音の回り込みを抑制**します。

・将来の教室数の増減や教育内容の変更等に柔軟に対応できるよう、**スケルトンインフィルの考えにより可変性の高い構造計画**とします。

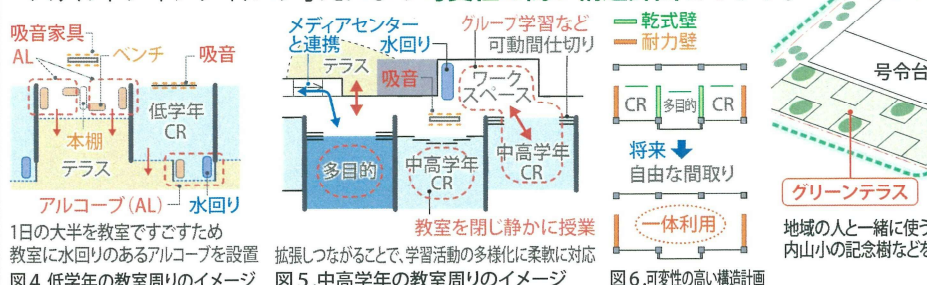


図4. 低学年の教室周りのイメージ

図5. 中高学年の教室周りのイメージ

図6. 可変性の高い構造計画

■ 屋内外に広がる多様な学習の場

・日射遮蔽や自然エネルギーの活用により、エネルギー消費量の削減を行います。適切な断熱、複層ガラスの採用などによりZEB readyの性能を確保します。これらの建築要素を見える化し、**学校全体を環境や自然科学を学ぶ教材**とします。木材を用いた内装や家具等、適材適所の木質化を行い、居心地の良い学習、生活環境をつくります。

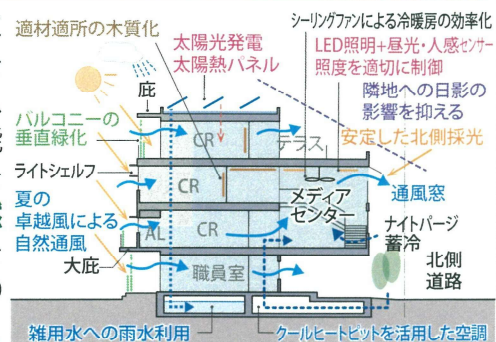


図7. 学校全体が環境学習の場のイメージ



図8. 創作テラスのイメージ

図9. 学校が学ぶ教材のイメージ

図10. メディアセンターのイメージ

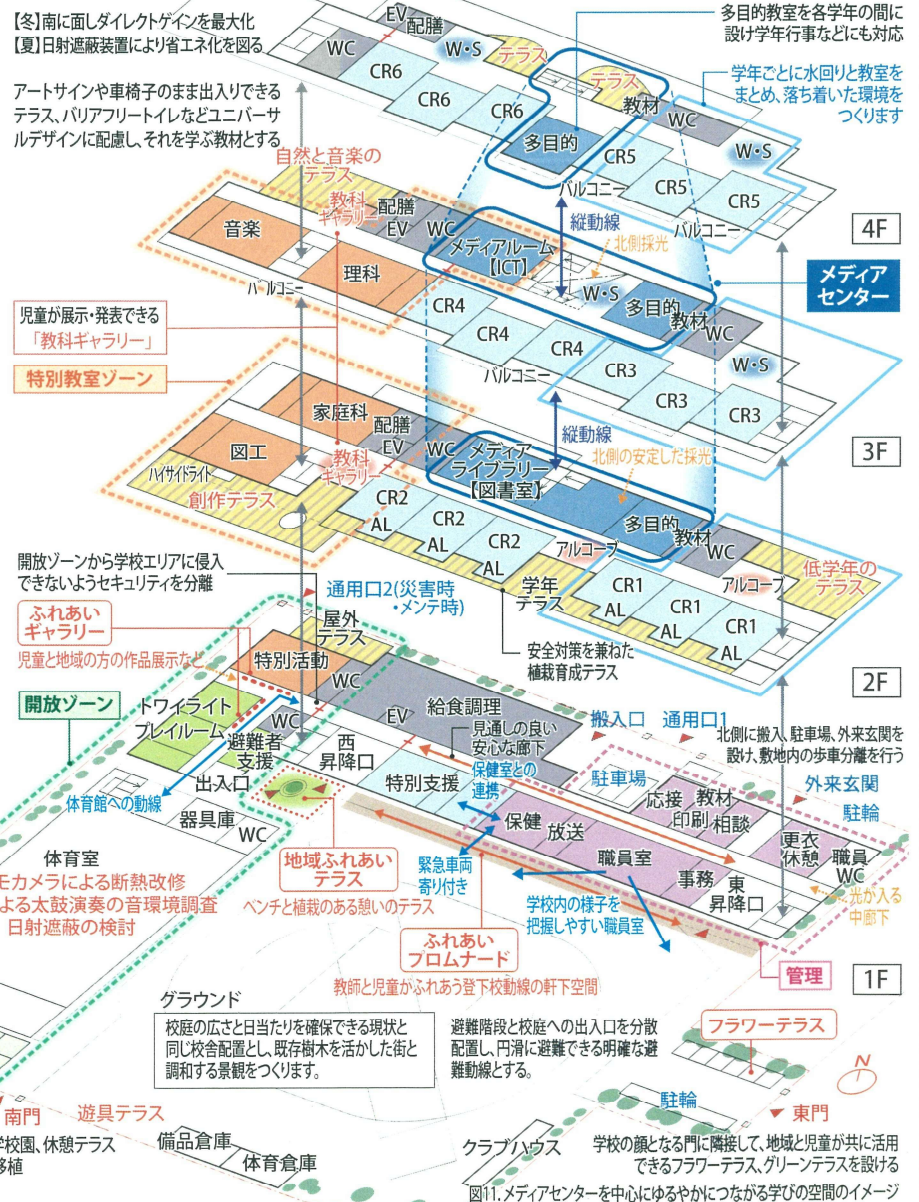


図11. メディアセンターを中心にゆるやかにつながる学びの空間のイメージ

② 学校と地域が連携・協働し、子どもたちをはぐくんでいける施設整備の考え方について

■ 児童と地域がつながる場所を散りばめる

・開放ゾーンの出入口と西側の昇降口を隣接させ、ベンチのある「地域ふれあいテラス」を設け、**地域と児童の交流が生まれる場**を計画します。

・児童の体育館動線でもある開放ゾーン中廊下に「ふれあいギャラリー」を設け地域の方や児童の作品展示の場所とし、地域との交流を図ります。

・東門、南門に休憩スペースを兼ねた地域の方と一緒に緑や花を育てることができる「フラワーテラス・グリーンテラス」を計画します。花壇づくりを積極的に行う大和小の活動をサポートします。

・内山小の記念樹などの一部を移植することで**内山小の記憶を継承**します。



図12. 地域と学校のつながりのイメージ

図13. 地域ふれあいテラスのイメージ

図14. 東門のフラワーテラスのイメージ

■ 地域全体で子どもたちを守り、育成できる安全な環境

・見通しの良い校内環境や、明確に区分できる開放区画により、**地域全体で見守る安心・安全な環境**とします。

・災害時のライフライン途絶時に自然エネルギーを活用し、避難生活と学校生活が共存でき、段階的に避難所を縮小できるようにゾーニングすることで、地域と児童が安心して過ごせる避難拠点を計画します。

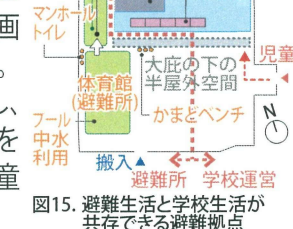


図15. 避難生活と学校生活が共存できる避難拠点

③ 多様な意見を反映するための設計業務の実施体制及びコミュニケーションの取り方について

■ 対話を重視した専門性の高いチームによる業務体制

・学校設計、改修の実績が豊富なスタッフやワークショップ専門のファシリテーターを配置するなど専門性の高いチームを構成し、**対話を重視した丁寧で誠実な対応・設計**とします。

・設計工程にベンチマークを設定し、関係者の確認期間を十分に見込みフィードバック期間を含めた工程管理を行うことで確実に意見を設計・計画に反映します。

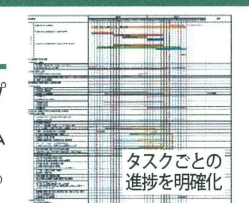


図16. 予定と出来高が明かな業務工程表

■ 「つながるツール」による対話と情報共有による緊密な連携

・関係者による2校合同ワークショップ(WS)を通じて、期待や不安、要望が見える化し、設計・計画にフィードバックします。児童と共に更新する学校づくりコーナーを地域に設置し、WS等での意見の反映結果が見える化し、統合される地域の**人づくり・地域づくりを推進**します。

・懇談会ではVR、パースや模型など、提案内容が見える化し、視覚的に誰もが計画内容を理解しやすい説明を行います。多様な意見の収集のみで終わらず、児童と地域の皆様が新しい学校づくりに参加し、**学校と地域を育てていくためのコミュニティの土台**を作ります。

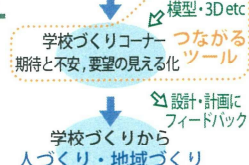


図17. 対話による地域づくりへのイメージ



図18. 直感で伝わる計画説明